

【書評】

徐興慶著 『朱舜水与東亞文化伝播的世界』

東亜文明研究叢書七八 国立台湾大学出版中心 二〇〇八年一月

佐藤 保

本書は、国立台湾大学人文社会高等研究院の「東亜經典与文化」(東アジアの經典と文化) 研究計画の出版物、「東亜文明研究叢書」のひとつとして、二〇〇八年一月に出版された。

著者の徐興慶教授は、現在台湾大学日本語文学系教授兼同系主任の任にあつて、近世及び近代の中日文化交流史の研究をメインテーマとする。徐教授は一九八四年に日本の九州大学大学院に留学、日本の対外関係史や対中文化交流史などを研究し、一九八七年に文学修士、一九九二年には文学博士の学位を取得した。博士論文の題目は「近世中日文化交流史の研究」である。その後も中日文化交流史の研究を継続し、一九九八年から二〇〇三年までの論文をまとめて、二〇〇四年に『近代中日思想交流史の研究』を日本・京都の朋友書店から出版した。

そのほか徐教授には、台湾における日本研究及び日本漢文学研究についての専著や徳川時代における日本儒学史論集の編纂

など多くの研究書があるが、本書『朱舜水与東亞文化伝播的世界』(朱舜水と東アジア文化の伝播の世界)は、朱舜水を軸に日本人及び来日中国人たちの儒学、仏教学、あるいは国家観などを比較検討し、日本と中国の学術文化交流の状況を明らかにする徐教授の最も新しい業績である。

徐教授の朱舜水研究は、この中日文化交流史研究の過程で始まったものである。明末に反清の抵抗運動を行っていた朱舜水(一六〇〇～一六八二)が、一六六〇年に倒清復明の夢破れて日本に亡命し、二二年間の在日生活をおくって当時の日本の学術、とりわけ水戸学に大きな影響を与えたことはよく知られているが、実は朱舜水研究が本格的に行われるようになった歴史は、そう古いことではない。もちろん朱舜水の生きた江戸時代の当時から、彼の著作集の編纂や行実、伝記などの記録と論述は絶え間なく行われてきたが、学術的な研究といえるものは二

○世紀に入ってからである。徐教授の見解によれば、一九〇一年の『史学界』第三一八・一一・一二期に発表された高瀬武次郎の「朱舜水」が中日学界における朱舜水研究の端緒を開いた論文であった（本書一ページ 脚注1）。だが、朱舜水研究が急速に進展したのは第二次大戦後であり、特に一九八六年二月に九州歴史資料館分館柳川古文書館が、柳川藩儒安東省庵（二六二二～一七〇一）と朱舜水が交わした大量の書簡と筆談録（筆語）を主とするいわゆる安東家史料を公開したことが朱舜水研究に一層の拍車をかけた。この安東家史料は、一九三〇年代から精力的に朱舜水研究にとりくんで学界をリードしてきた石原道博氏が、「いま安東家には、学界未発表のおびただしい文書があるときく。その公開を鶴首してまつのは、ひとりわたくしだけではあるまい。」（人物叢書『朱舜水』二三六ページ 東京・吉川弘文館、一九六一）と、早くから公開を熱望していたものである。

徐教授自身も安東家史料の公開の恩恵に浴した一人である。博士学位の取得の年には、安東家史料を中心に広く日本全国の図書館、資料館などから集めた書簡や筆談録などの資料を朱謙之編『朱舜水集』（北京・中華書局、一九八一）と校合し、全集未収の資料をまとめて『朱舜水集補遺』（台湾・学生書局、一九九二）を公刊した。

従来の全集に全く収録されていない舜水の書簡四三通、筆

語六二、問答二三通をはじめ、舜水の手になる跋文や詩、それに部份的に抄録されてきた書翰二〇、問答八通の全文を掲げ、それぞれの相手（二二人）別に、年代を可能な限り比定して年次順に配列し、かつ適切な解説が付されており、舜水の知られざる側面や、従来不明確であった点が解明される。

これは、同書の冒頭に付された九州大学における指導教官の中村質教授の序文である。

かくして朱舜水研究に入った徐教授は、そのきっかけを上述の『近代中日思想交流史の研究』の「あとがき」で次のように記す。

：私は、日本の各機関、公立図書館、郷土資料館の所蔵する漢文史料の発掘を行うことを希望していた。幸い一九八六年に柳川古文書館所蔵の安東家史料の中で大量の朱舜水関係資料が公開された。それで、改めて人物による中日文化交流史に研究方向を変えた。朱舜水研究の分野に入ると、歴史学のほかに儒学、哲学思想などの分野の知識をも摂取しなければならない。朱舜水と同時代の日本の儒者たちの往来書簡を解読して行くなかで、何とか朱舜水の儒学思想と日本の文人を関連づける思想交流史模索の鍵を求めた。

すなわち徐教授は留学地が柳川藩のあった九州であったこ

と、また留学の時期がたまたま安東家史料の公開と重なったこと等、地の利、時の利に恵まれて朱舜水研究に入ることになったのである。

その後『朱舜水集補遺』はさらに新史料を加え、書簡は八四通、筆語は六六通にのぼるなど大幅に増補されて、二〇〇四年に『新訂朱舜水集補遺』（台湾大学出版中心）が「東亜文明研究資料叢刊」のひとつとして出版された。この「資料叢刊」もまた、台湾大学の「東亜經典与文化」研究計画の出版物のひとつである。

以上がいわば徐教授の朱舜水研究の前置きであり、『朱舜水と東亞文化傳播の世界』は、上述のような基礎的且つ周到な準備を経て、朱舜水研究の専著として執筆されたのである。

同書の構成は、本文三四八ページを七章に分け、ほかに巻頭に黄（俊傑）序、林（慶彰）序、楊（儒賓）序の三序、巻末に「名詞索引」「人名索引」を付す。章題を日本語に訳して列挙すれば、

- 第一章 東アジアの視野から朱舜水研究を見る
- 第二章 朱舜水と東アジア儒学の発展
- 第三章 朱舜水と貝原益軒の「経世致用」観
- 第四章 隠元禪師と朱舜水の国家アイデンティティ
- 第五章 朱舜水と安東省菴の思想の異同
- 第六章 独立禪師と朱舜水・文化伝播者の異なる論述

第七章 心越禪師、徳川光圀と朱舜水の思想の変遷

各章はいずれも「序論」で始まり、「結論」で終わる。その間の本論部分はいくつかの小節に分かれるが、その分節はそれぞれの章によって異なる。いま具体例として、第一章の構成と内容をやや詳しく紹介してみよう。

「一、序論」過去数十年来の日本と台湾の朱舜水研究の状況を概観した後に、かつて一九九二年に『朱舜水集補遺』を編纂した後に、かつて一九九二年に『朱舜水集補遺』を編纂したから「朱舜水研究参考文献」を整理したこと、そして同整理作業は二〇〇四年の『新訂朱舜水集補遺』の編纂時にも継続されたことを述べ、本章では「日本、中国大陸及び台湾」の朱舜水研究の内容と趣向を、以下の四点を柱としてまとめてある。

(一) 朱舜水研究に関する文献の刊行及びそれらの内容の紹介。

(二) 朱舜水研究の特徴及び関連する主題の論述の異同の回顧

(三) 問題意識の探求・学術研究と政治主張のあいだ

(四) 未来の朱舜水研究の展望

二、朱舜水全集の刊行及びその内容」朱舜水逝世の翌年、一六八四年に加賀藩主前田綱紀の命をうけて儒臣の五十川剛伯が編集した『明朱徵君集』一〇巻をはじめとして、一九九一年に北京・中国書店が排印刊行した『朱舜

水全集』二五巻までの一〇種の全集について、書誌的な解題を行う。

「三、朱舜水の研究史」 地域別、内容別に整理し、解題を付した研究文献目録である。

(二) 日本の朱舜水研究

1 徳川光圀と水戸学の発展 一八種の文献。

2 朱舜水の学芸 九種の文献。

3 朱舜水の乞師活動 一一種の文献。

4 朱舜水の思想と日本儒学史の発展 一七種の文献の解題及び徳川前期の朱子学、闇齋学、古学と

朱舜水のかかわりの考察。

5 明末の遺臣と人物交流 二三種の文献の解題及び特に安東省菴と交わした書簡についての考察。

6 朱舜水の中日文化交流に対する貢献 六種の文献の解題及び特に石原道博氏の業績についてのコメント。

メント。

(二) 中国大陸の朱舜水研究 清末の黄遵憲、王韜、民

国初年の梁啓超等の朱舜水に対する言及やコメントから、一九九〇年代までの中国大陸における朱舜水研究の概略を述べる。

(1) 朱舜水の学術思想の日本に対する影響 八種の文献。

(2) 朱舜水の思想評価 一〇種の文献。

(3) 朱舜水の哲学思想 一〇種の文献及び中国哲学思想史研究の専家李甦平教授の研究についてのコメント。

学思想史研究の専家李甦平教授の研究についてのコメント。
(三) 台湾の朱舜水研究 一六種の文献と台湾の朱舜水研究の概況。

(四) アメリカの朱舜水研究 呂玉新編「有関朱舜水研究目録」(台北・漢学研究中心『漢学研究通訊』第二

三巻第四期、二〇〇四年一月)中の「英文文献」にもとづくもの。著書一二点、論文一〇点の解題。

「四、問題意識の探求…学術研究と政治主張の間」 清末以来の抗清復明の忠臣義士としての朱舜水の評価と学術研究としての朱舜水研究について。

「五、結論」 以上の「日本、中国大陸、台湾」の朱舜水研究を領域(テーマ)別に整理して述べるとともに、「朱舜水研究の領域と統計一覧表」を付す。そして、今後の課題として次の三点を提示する。

(一) 朱舜水の新史料の再発掘と解読

(二) 朱舜水研究の新方向の開拓

(三) 国際共同研究の組織と推進

以上やや長くなったが、これが第一章の小節・小項目の構成であり、それぞれのおおよその内容である。もちろん、本章はこれまでの朱舜水研究の回顧を目的として関係文献の分類整理

を必要とするために、他の章にくらべれば小節・小項目の数が多くなるのはやむを得ないのであるが、それにしても徐教授の文献収集の周到さがよくうかがわれるのである。

第二章は、「乞師」（軍事援助）のためにしばしば来日した朱舜水が、一六五九年に日本永住を決意し、水戸光圀の招聘をうけて前期水戸学の形成に大きな影響を及ぼすことになった経緯と、朱舜水が伝えた思想内容が検討されている。結論からいえば、彼が日本に伝えたものは、陽明学でも朱子学でも、また古学でもなく、畢竟、孔子の礼楽刑政を重視する経世済民の実学思想（経済の学）であった、とする。

なお本章は、もと『新訂朱舜水集補遺』に載せた「朱舜水対東亜儒学發展定位的再詮釈」（朱舜水の東アジア儒学の發展に対する位置づけの再検討）の再録であり、同文の日本語訳は『近代中日思想交流史の研究』第一部第一章に「朱舜水の実学思想と日本の受容」と題して収録されている。

第三章は前章をうけて、貝原益軒（一六三〇～一七一四）の「経世致用」（経世済民）の思想と朱舜水の実学思想を比較検討するもの。本章には朱舜水思想の形成と内容が詳述されている。結論は、両者は直接の交渉はなく、しかも地方（福岡）儒者（貝原益軒）と中央の儒者（朱舜水）という違いはあったものの、それぞれの啓蒙的な実学思想と経世致用の学問は多くの点で共通する、と指摘する。

第四章は、黄檗文化をもたらした日本の思想界に大きな影響を与えた隠元禪師（一五九二～一六七三）の文化傳播者としての活躍と同時に、隠元の鄭成功をはじめ抗清人士との交流を論じる章である。ほかに明清戦乱の際に日本に逃れてきた中国の僧侶や文人たちのこと、また日本に定住する前の朱舜水の「海外経営」について考察する。

第五章は、朱舜水と最も親しい関係にあった弟子の安東省菴（一六二一～一七〇二）と朱舜水の思想上の異同を論じ、徳川初期の日本儒学界における意義を検証する。

第六章は、独立禪師（戴曼公 一五九六～一六七二）、朱舜水、頼川入徳（陳明德 一五九五～一六七四）の関係と思想の相違などを検討する章。独立禪師、頼川入徳とも渡日の中国人で、独立禪師は黄檗宗の僧侶、頼川入徳は医師で日本に帰化した人。これまであまり研究されることがなく、徐教授は新発掘の安東家文書を用いて二人と朱舜水の関係、思想の相違などを論証する。また朱舜水と独立禪師の詩に対する考えの違いなどが論じられている。章末に「独立禪師、朱舜水関係年表」を付す。（但し、本章の第四節「朱舜水と独立の詩に対する異なる論述」から第五節「独立の詩作及びその文化の傳播」にかけて、小項目の立て方に少し乱れがある。）

第七章は、やはり来日の曹洞宗の禪僧、東臯心越（一六三九～一六九五）と徳川（水戸）光圀、朱舜水の関係述べる。特

に心越の伝えた曹洞禅の日本に与えた影響が検討されている。章末に「心越禅師留伝日本之墨宝・文物一覽表」（心越禅師の日本にのこした墨宝・文物一覽表）を付す。

以上、『朱舜水与東亜文化傳播的世界』の内容を概観して感じることは、中日思想・文化交流史研究の対象としての朱舜水の大きさである。本書は、日本定住以後の朱舜水にしぼって、彼の言動や思考を検証することに主眼がおかれているが、ただか二二年の日本在住期間に朱舜水が日本にのこしたものはきわめて大きい。それは、徳川期の全期を通じて日本の学術・文化界に大きな影響を与えたばかりか、幕末近代にまでも持続していたことはよく知られている。本書は、日本における朱舜水の存在と影響の出だしの部分を、彼の友人・門弟たちとの具体的な交流を通じて明らかに意図されようとしたものと言えよう。

徐興慶教授の朱舜水研究の特色の第一は、文献資料の収集調査の広さと精密さである。第二は、そのように周到に集められた文献資料の読み込みによる論述の確かさであろう。第三は、徐教授の朱舜水研究は、朱舜水その人の学術や思想の研究にとどまらず、彼の身辺にいた友人・門弟たちにまで調査研究が広く及んでいることである。

以上のことは、『新訂朱舜水集補遺』を見れば直ちに了解されることで、同書には徹底して収集された文献資料の翻字と句

読、年代推定、必要な解説など、きわめて困難な作業が集積されている。そればかりか、同書の付録には「朱舜水友人・弟子伝記資料」が付されていて、徐教授の朱舜水研究の確かな基礎を知ることができる。

さらに、敢えて特色の第四をあげるとするならば、それは朱舜水研究にかける徐教授の情熱であろうか。機会をとらえては日本各地の図書館や資料館、寺社などを訪れての文献資料の渉猟、中には何度も足を運んでようやく閲覧の許可を得たりといった苦労話が、時折論文のなかに散見する。研究者としては当然の話ではあるが、しかし朱舜水の本質に迫ろうとする徐教授の飽くことなき情熱には、やはり頭の下がる思いを禁じ得ない。

ともあれ、今後の世界の朱舜水研究は、必ずや徐興慶教授の研究成果を踏まえて展開されることはまちがいない。